童話部のものがたり

つー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
童話部のものがたり

【Ｎコード】
Ｎ４８９２Ｚ

【作者名】
つー

【あらすじ】
時はさほど遠くない未来。一般的なごく普通（？）の高校、ごく普通に悩みながらも入学した少女、比較的普通なクラスメイト達。そしてごく普通の部活動・・・。え？今日の活動はアリス探し！？
「私には何が何だか・・・。」
学園童話ファンタジー、ここに始動！！

プロローグ　ある男の約束

こんなお話をご存知かな？人が書き上げた物語には、時として命が宿ると。いいや、本に足が生えて動き回るというようなことではないよ。

赤い絨毯の敷き詰められた部屋で、初老の男性が本のページをめくっていた。紙の擦れる音が微かに響いている。

「そのようなことをおっしゃるために、僕を呼んだのですか？学園長」

少し幼さの混じった目を男は彼に向け問いかける。

「桃園君、君は先を急ぎすぎる。童話作家はゆっくりと、読者の視点で話を進めねばならないだろう？」

「では、本題をお願いします。」

学園長と呼ばれた男性は、彼に目をやり、にこりと笑った。

「桃園君、物語には命が宿る。これは事実なんだ」

「足が生えて動き回るとでも？」

「だから違うと言っているだろう？文字通り、命が宿るんだ」

「・・・おっしゃる意味が分かりません。」

学園長は彼の困惑した顔を見ると、手を大きく広げ、この部屋を示した。

「この学校は、私が元あった童話博物館の土地を買って建てた。・・・現在三年生の君は知っているはずだね」

「えぇ、入学のときから既に・・・」

「童話博物館というくらいだ。世界各国の童話が集まっていた。童話に宿る命も、たくさん残っていた。もちろんそれらの作品は、学園の童話保管図書館に保存してある。抑えるのに苦労した・・・。何せ相手は狼、鬼、悪女にと、化け物だらけだ。もって何年になるだろうなぁ・・・。」

「が、学園長!?本当に分かりません!僕は何をすれば良いんで

すか？」

困りきった彼に男はゆっくりと歩み寄り、両肩に手を置き、諭すように言った。

「君の力を借りたい。いや、君の子孫の力を借りたいんだ。」

物語は、未来へと受け継がれる・・・。

憂鬱、春。

「新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます！」
明るめの茶髪を揺らして、女の先生が微笑んだ。黒板には大きく、おめでとう！！の文字が書いてある。きっと先輩達が書いたのだろう。
「私は一年間みんなの担任を勤めさせていただく、工藤　美雪です！年は永遠の十五歳だよっ？」
・・・ギャグだろうね。うん。だって先生どう見ても・・・。
「せんせー、どう見てもアラサーにしか見えませ・・・ごふっ」
「あら？入学早々失言するなんて元気ね～」
先生のチョークが金髪の男の子の額にクリーンヒットした。言わなくてよかった。
「では、早速自己紹介をしてもらおうかしら？まずは出席番号一番の葵　優香さん」
「はいっ！葵　優香です。趣味は・・・」
あぁ～・・・。もう・・・。始まっちゃった・・・。自己紹介ってどうしてあるんだろう。第一印象でその人の性格とか、能力が決まるわけじゃないのに。
「案山子　陽でーすっ！」
えらい騒がしい人が出てきたな。あ、さっきチョークぶつけられてた金髪の人だ。赤いカチューシャなんて付けてたんだ。
「ボクは風紀委員会に入ろうとしてるんだよねぇ～！ま、とりあえずみんな、よっろしくねぇ～☆」
この人とは関わらないようにしよう。言葉一つ取ってもイライラする。それにしても風紀委員に入りたいだなんて、一年生から目標がはっきりしてるなぁ。あれくらい軽いノリなら、いろいろ悩まずに済むんだろうな。うらやましい。
「・・・宍戸　勇気です・・・。えっと、僕も陽くんと一緒で風

紀委員会に入るつもりです。よろしく・・・。」
あ、なんだか打って変わっておどおどした感じの子だ。風紀委員会で陽くんとちゃんとやっていけるのかが少し心配だけど。
「よろしくねーん、しっしー！」
「し、しっしー！？そのあだ名はちょっと・・・。」
早速陽くんが勇気くんに声をかけていた。なんかもう既に打ち解けてるのかな。勇気くんの表情が柔らかい。あぁやってすぐに友達を作れたら楽なのに・・・。
「・・・なので、よろしくお願いします！」
もう次だ・・・。どうしよう。嫌だよ・・・。
「次の人ー？えっと・・・、桃園さん？」
「・・・はい・・・。」
仕方なく、よろよろと立ち上がる。うぅ、クラス中の視線が冷たいよ・・・。
「桃園・・・。花・・・で、す。」
ぼそぼそと自分の名前だけを言って席に着いた。教室がざわめく。
「あら、桃園さん明るそうなのに、具合悪いの？大丈夫？」
言われた瞬間、ぐっと唇を噛む。ポニーテールにした茶髪が少し色を薄くした気がした。
私は、明るくなんか無い。教室の隅で本を読んでるほうが好きなんだ。茶髪は元からだし、ポニーテールはお父さんに似合うって言われたから結わえてるだけなのに。スポーツは苦手だし、顔が派手なのはお母さん譲りなだけ。
「なんか印象と違うね～」
「見た目派手なのに、雰囲気暗いね」
言われ続けられた言葉が聞こえてくる。もう、放っておいてよ・・・！
「はいはい、静かに！次の人！」
がたっと音がして、後ろの席に人が立ち上がる。残りの淡々とした自己紹介を聞きながら、私はため息をついた。家から学校までの

道、体育館から教室までの廊下で何回もついたため息。
やっぱり私はみんなに避けられるしかないのかな・・・。
髪留めに触って、形が崩れていないか確かめる。
お父さん、私、この学校でやっていけるのかな・・・。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4892z/

童話部のものがたり

2011年12月18日10時58分発行